

RTミドルウェアツール紹介： 利用可能なRTコンポーネントや ツールについて

宮本 信彦

国立研究開発法人産業技術総合研究所
インダストリアルCPS研究センター
ソフトウェアプラットフォーム研究チーム



ツールのダウンロード

- 以下からLibreOffice-portable.zipをダウンロードして適当な場所に展開してください。
 - <https://drive.google.com/uc?id=1hvNcx3psttw-6b-x1nuKGrVJwh9UOcJo&export=download>
- 講義資料
 - <https://openrtm.org/openrtm/sites/default/files/6969/2020SummerCamp-02.pdf.pdf>
- 上記URLはZoomのチャットでお知らせします



これからどうやってロボットシステム
を開発するのか？

ハードウェア、既存の RTC の動作確認



- RTCの導入方法、使用方法の調査
- RTCのインストール
- RTCの入出力の確認

RT System Editor
の利用方法は講習
会で説明済み

設計

要求図

内部ブロック図



- システムの要求
- 使用するハードウェア
- 再利用する部品

この講義ではRTCの動作確認、新規RTCの開発で有用なツールを紹介する

昨日説明があった

RTC Builderの
利用方法は講習
会で説明済み

- RTCの詳細な仕様を決める
- コーディング、ビルド
- RTCの動作確認、デバッグ

プログラムの構築、動作確認

- RT System Editor
- rtshell
- 動作確認

rtshellについては
前の講義で説明
があった

紹介するツール

- **RtStorage**

- 元々セックでOpenRTM.NETを開発していた人が作ったツール
- OutPortから出力されたデータをファイルに記録
- 保存したデータを、RTコンポーネントのInPortに対して再生

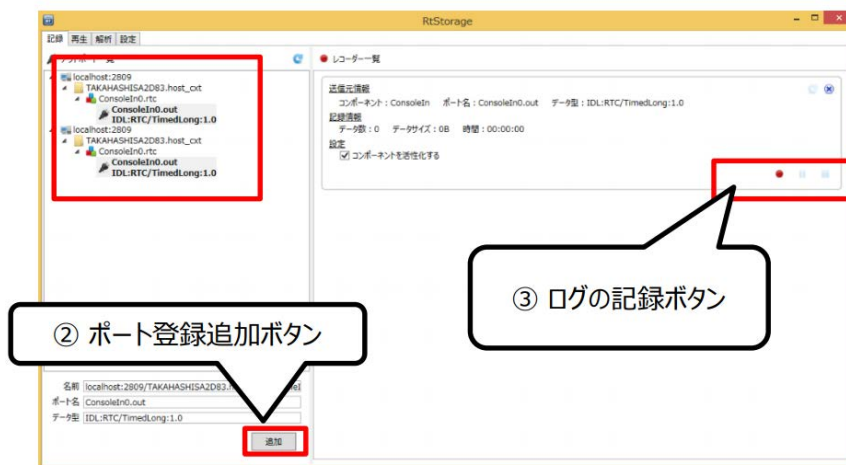
- **表計算ソフトとRTCを連携させるためのツール**

- Excel、LibreOfficeCalcのセルの値をデータポートから入出力する
- 新規に開発したRTCの動作確認が簡単にできる
 - OutPortから出力された値の確認
 - InPortに任意の値を入力したときの挙動
- 既存のRTCについても、動作がよく分からない場合に確認できる

RtStorage

RtStorageの概要

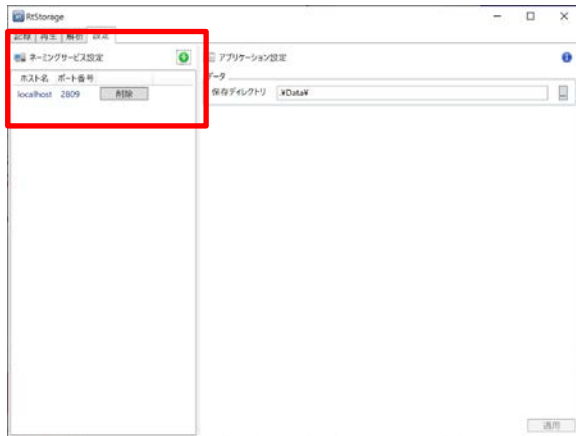
- できる事
 - OutPortから出力されたデータをファイルに記録
 - 保存したデータを、RTコンポーネントのInPortに対して再生
 - 上記の保存、再生がGUIで簡単にできる



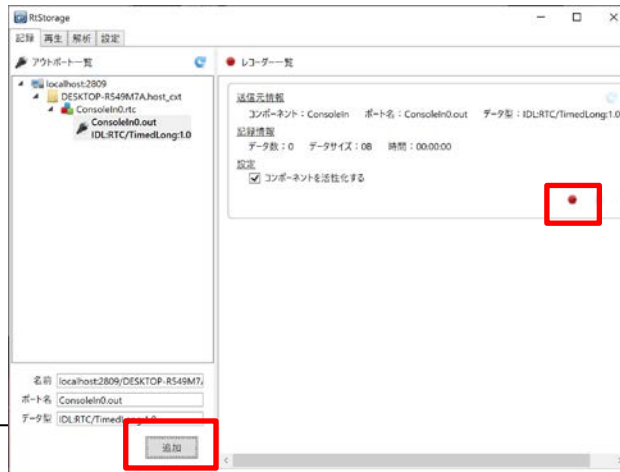
- インストール手順
 - 以下からRtStorage-ver.0.3.1.zipをダウンロードして展開
 - <https://github.com/zoetrope/RtStorage/releases>
 - RtStorage.slnをVisualStudioで開いてソリューションをビルド
 - RtStorage¥bin¥ReleaseのRtStorage.exeを実行すると起動する

RtStorageの使い方

1. RtStorage.exeを実行する
2. ネームサーバーを登録する



3. ポートを登録追加、記録の開始



表計算ソフトとRTCの連携

表計算ソフトによるデータ入出力

どんなデータが出力されているか？

新規に開発したRTC

セルからデータを読み込み

セルにデータを書き込み

入力データ		出力データ	
1	2	5	4
2	3	3	2
3	4	2	1
4	5		

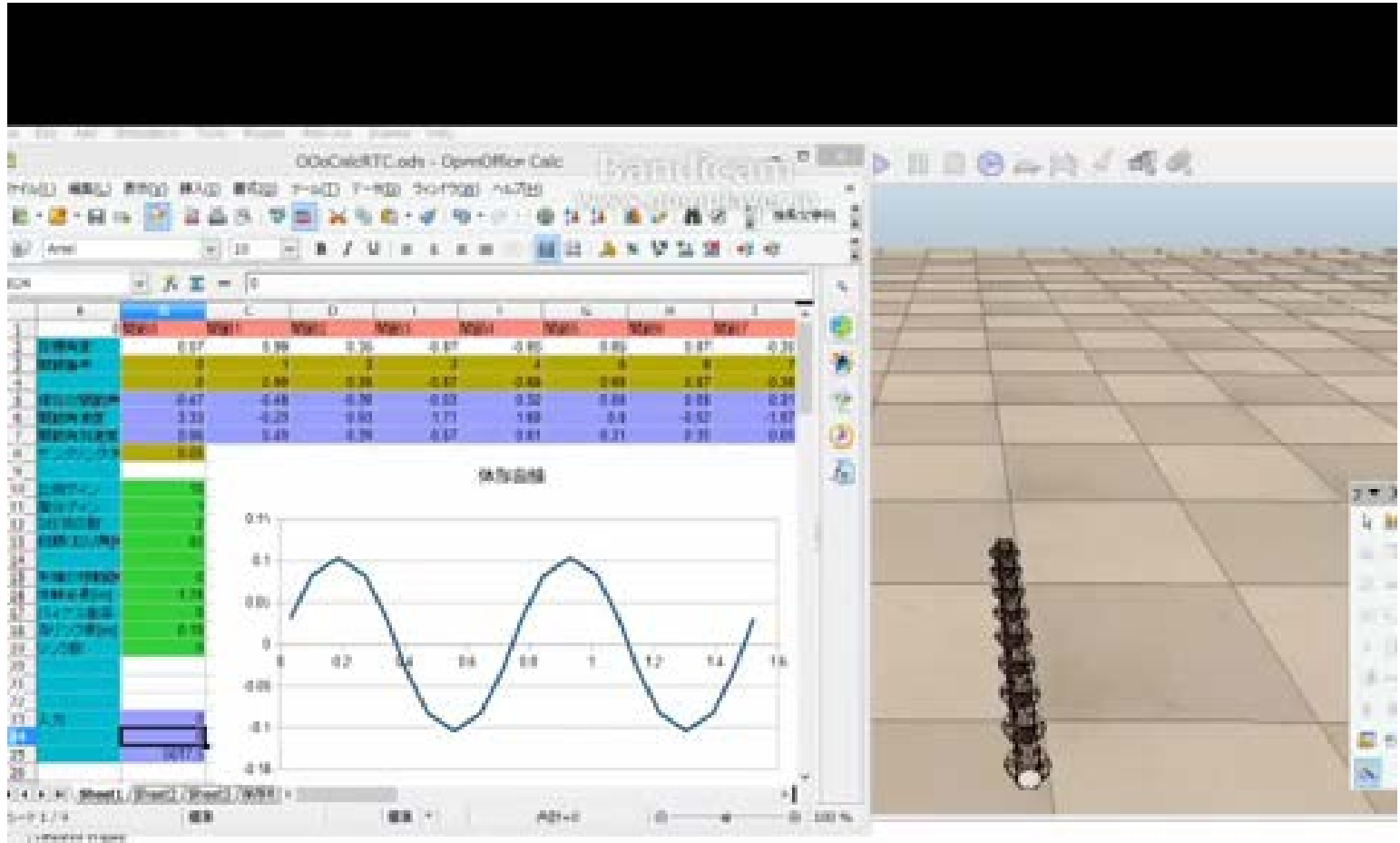
デモ動画

The screenshot displays the RT System Editor interface. On the left, a data table shows values for columns A, B, and C over 20 rows. On the right, a system diagram shows two components, 'ConsoleIn0' and 'OoOCalcControl0', connected by a directed arrow. Below the diagram, there are configuration and management panels.

	A	B	C
1	0	1	
2	0		
3	0	0.9	
4	0		
5	0	0.8	
6	0		
7	0	0.7	
8	0		
9	0	0.6	
10	0		
11	0	0.5	
12	0		
13	0	0.4	
14	0		
15	0	0.3	
16	0		
17	0	0.2	
18	0		
19	0	0.1	
20	0		
21	0	0	
22	0	0.9	20
23	0	0.8	19
24	0	0.7	18
25	0	0.6	17
26	0	0.5	16
27	0	0.4	15
28	0	0.3	14
29	0	0.2	13
30	0	0.1	12
31	0	0	11
32	0	0.9	10
33	0	0.8	9
34	0	0.7	8
35	0	0.6	7
36	0	0.5	6
37	0	0.4	5
38	0	0.3	4
39	0	0.2	3
40	0	0.1	2
41	0	0	1

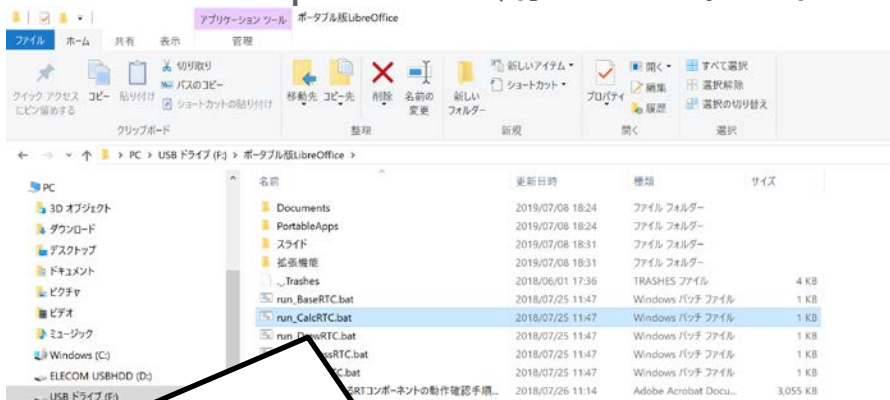
RTCをアクティブにします

デモ動画

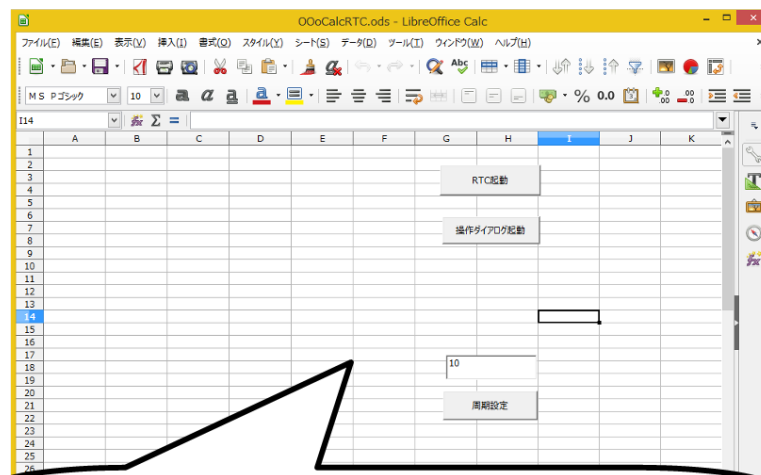
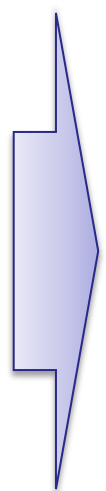


ポータブル版LibreOffice対応RTC

- <https://drive.google.com/uc?id=1hvNcx3psttw-6b-x1nuKGrVJwh9UOcJo&export=download>
- 配布ファイルに以下のソフトウェアを同梱
 - ポータブル版LibreOffice
 - OpenRTM-aist-Python
 - OpenOffice用RTコンポーネント



ポータブル版LibreOffice¥run_CalcRTC.bat
をダブルクリック



LibreOffice Calcが起動する

※Excelがインストールされている場合は、OpenRTM-aist 1.2付属のExcelRTCも使用可能

事前準備

- OpenRTPを起動

- Windows 7

- 「スタート」→「すべてのプログラム」→「OpenRTM-aist 1.2.0」→「Tools」→「OpenRTP」

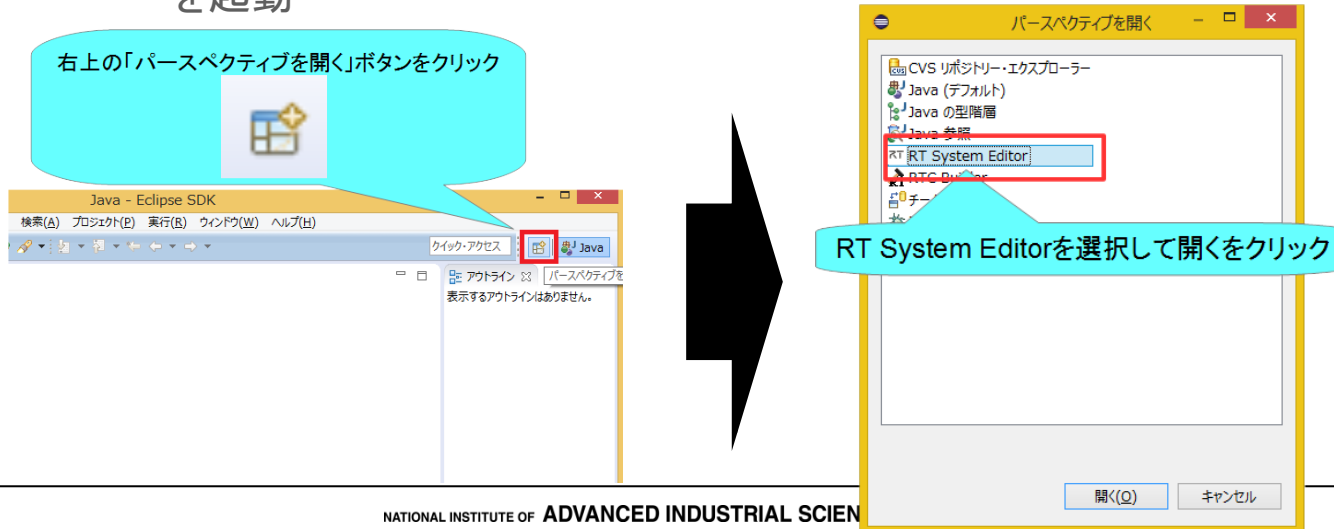
- Windows 8.1

- 「スタート」→「アプリビュー(右下矢印)」→「OpenRTM-aist 1.2.0」→「OpenRTP」

- ※同じフォルダに「RTSystemEditorRCP」がありますが、これはRTC Builderが使えないので今回は「OpenRTP」を起動してください。

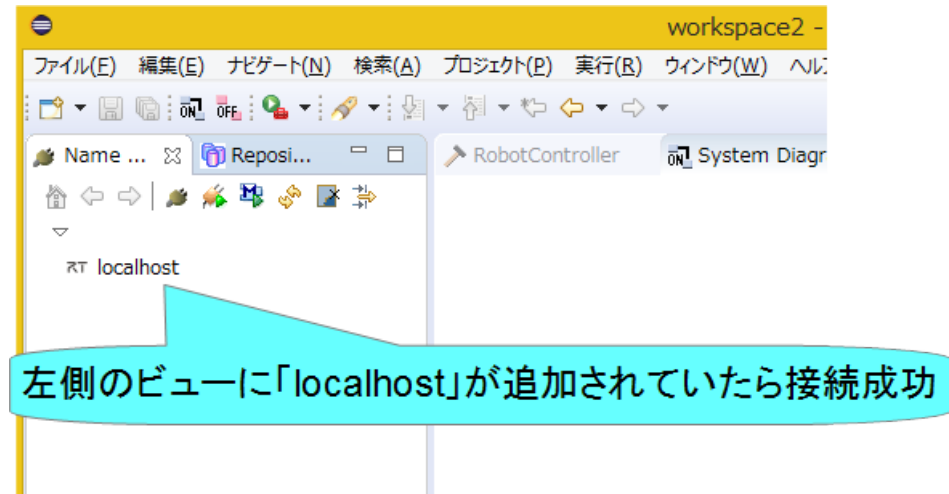
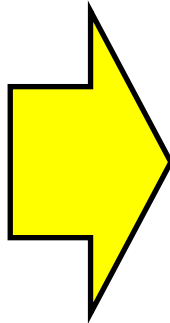
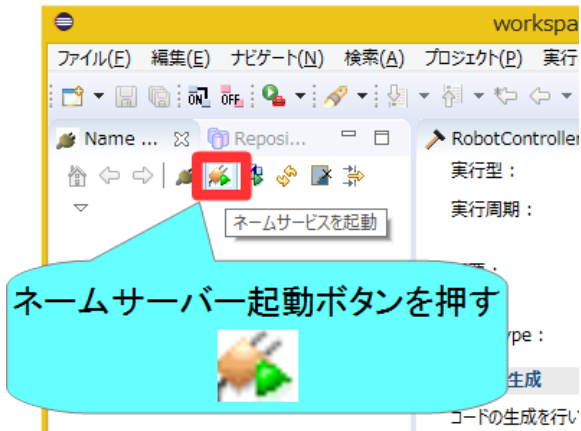
- Windows 10

- 左下の「ここに入力して検索」にOpenRTPと入力して、表示されたOpenRTPを起動



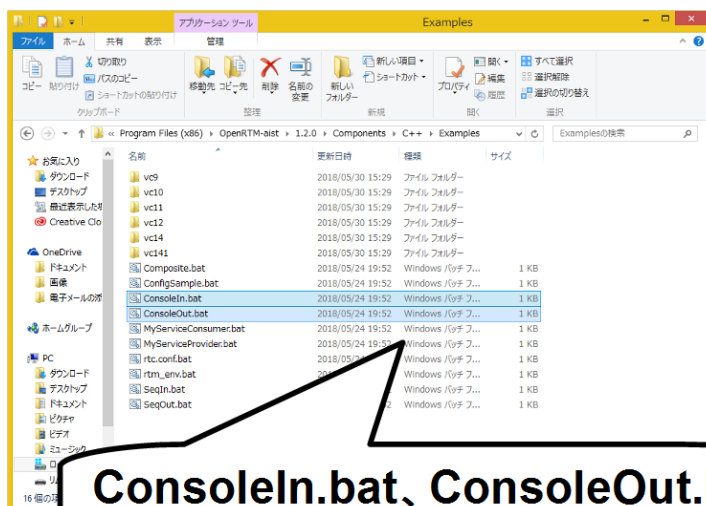
事前準備

- ネームサーバーを起動

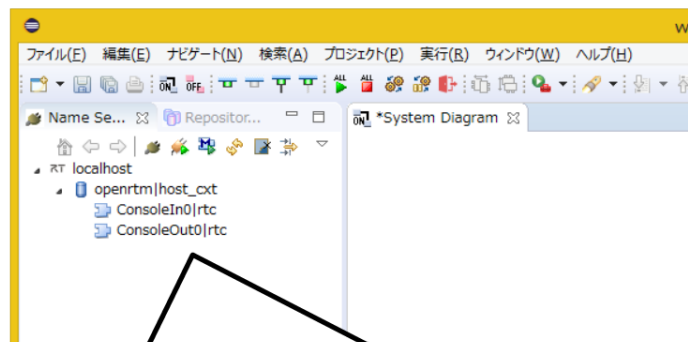


動作確認用のRTCを起動

- ConsoleIn、ConsoleOutのサンプルコンポーネントを起動する
 - Windows 7
 - 「スタート」→「すべてのプログラム」→「OpenRTM-ai 1.2.0」→「Tools」→「C++_Examples」
 - Windows 8.1
 - 「スタート」→「アプリビュー(右下矢印)」→「OpenRTM-ai 1.2.0」→「C++_Examples」
 - Windows 10
 - 左下の「ここに入力して検索」にC++_Examplesと入力して、表示されたC++_Examplesをクリック



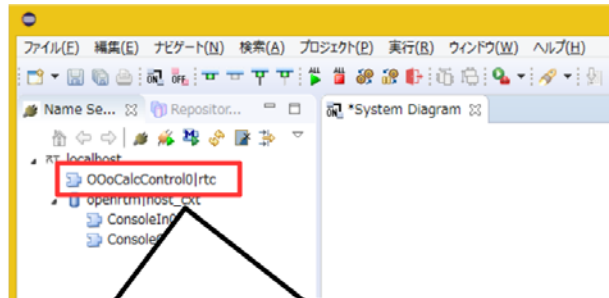
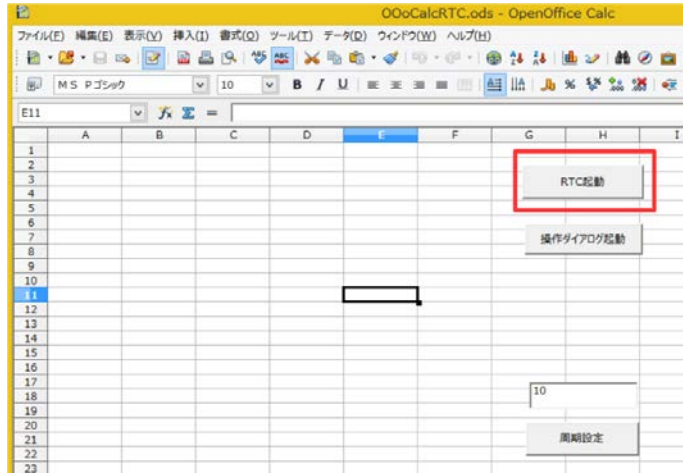
ConsoleIn.bat、ConsoleOut.bat
をダブルクリックして実行する



ネームサービスビューにConsoleIn、ConsoleOutが表示されていれば起動成功

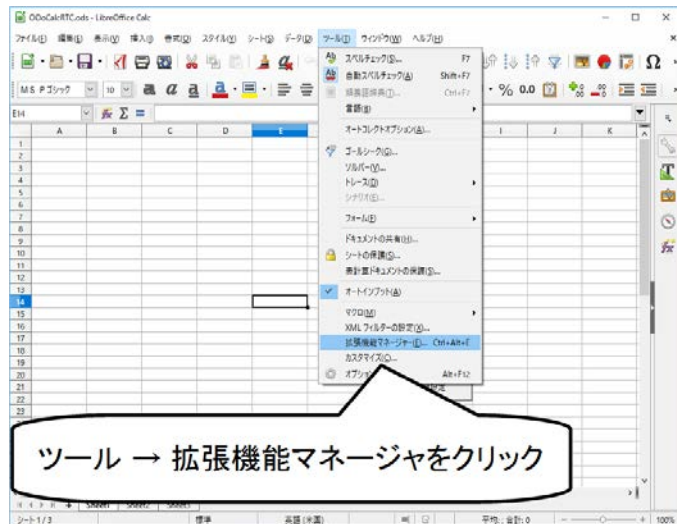
Calc用RTCを起動

- LibreOffice Calcの「RTC起動」ボタンをクリックする

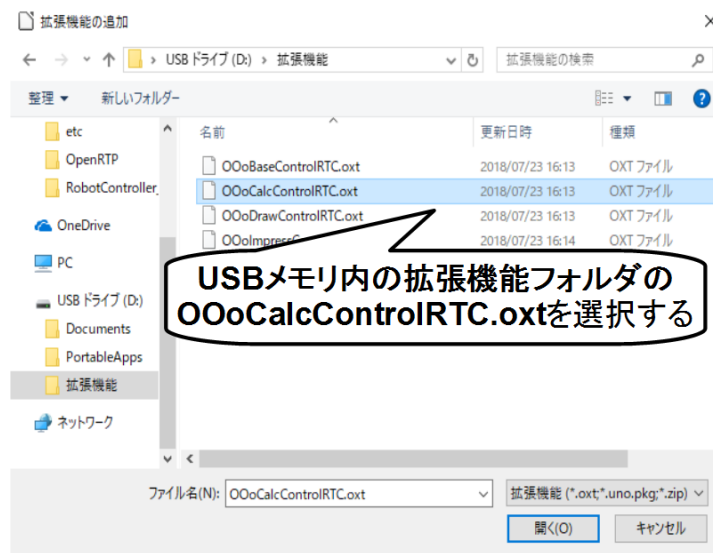
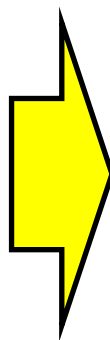
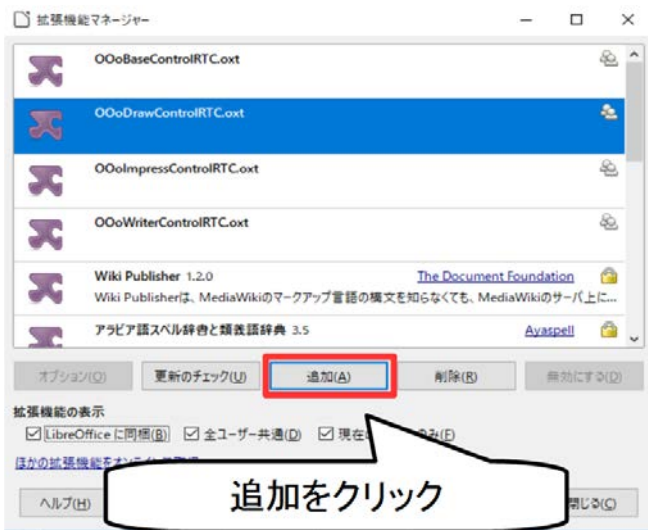
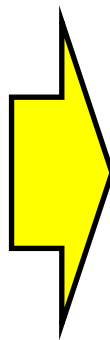


名前サービスビューにOOoCalcControl0
が表示されていれば起動成功

起動に失敗する場合

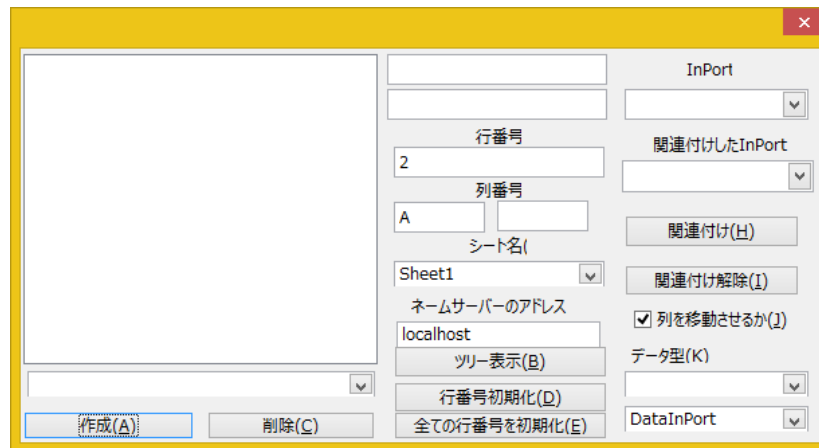
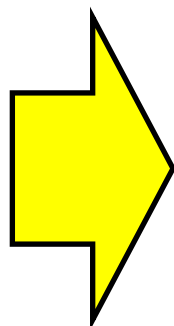
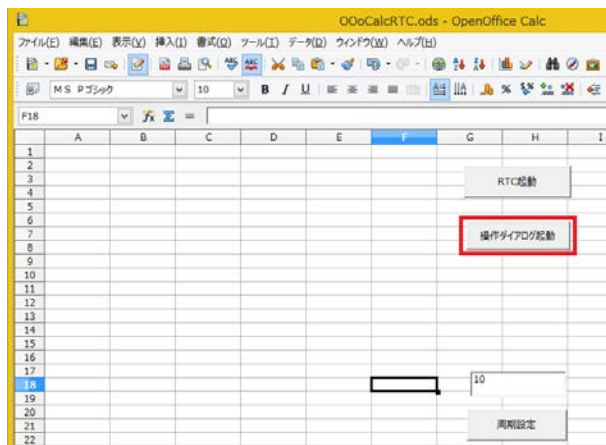


ツール → 拡張機能マネージャをクリック

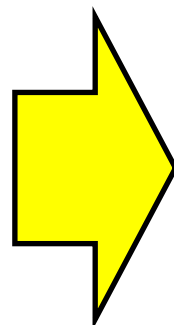
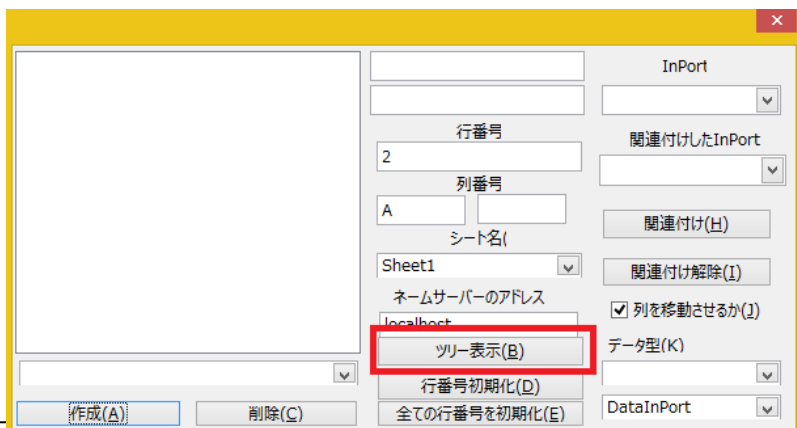


OutPortの接続

- LibreOffice Calcの「操作ダイアログ起動」ボタンをクリックする

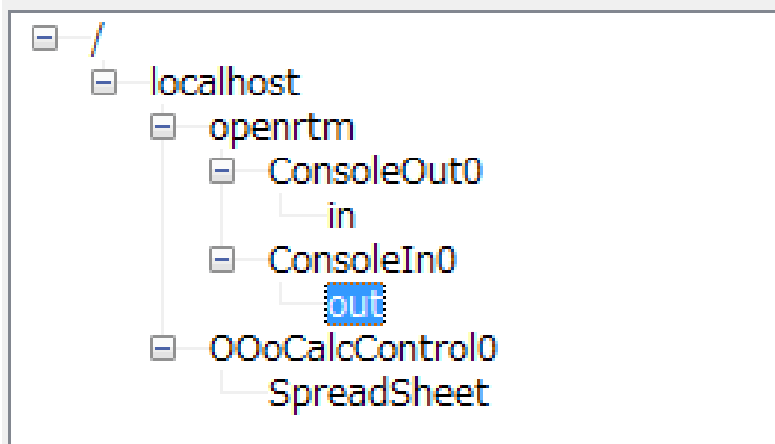


- 「ツリー表示」ボタンをクリックする

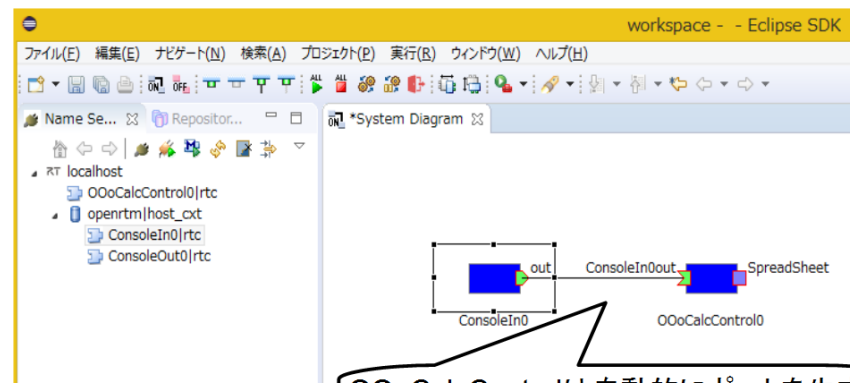
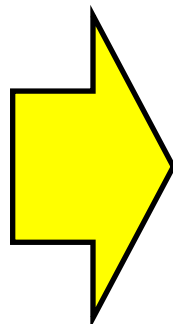
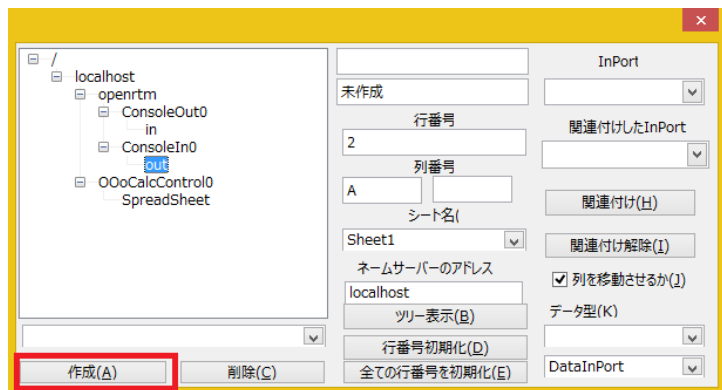


OutPortの接続

- ツリーから**ConsoleIn**の**out**を選択



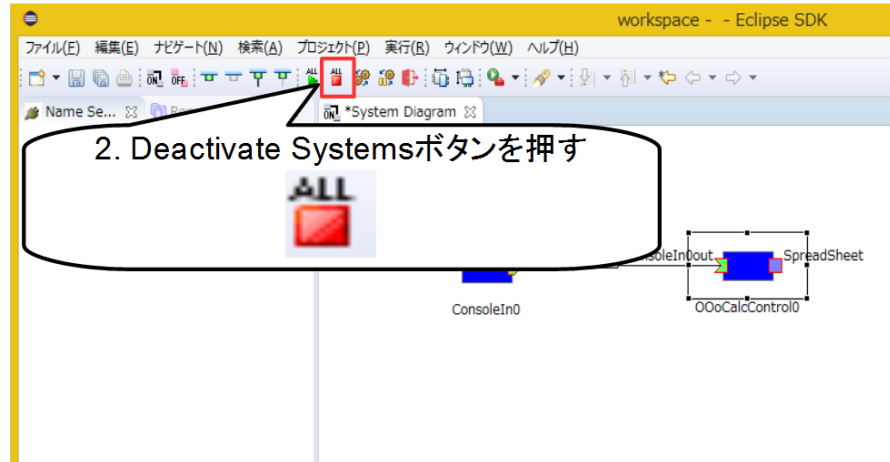
- 「作成」ボタンをクリックする



OoCalcControl0は自動的にポートを生成し、ConsoleInと接続する

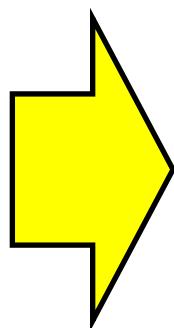
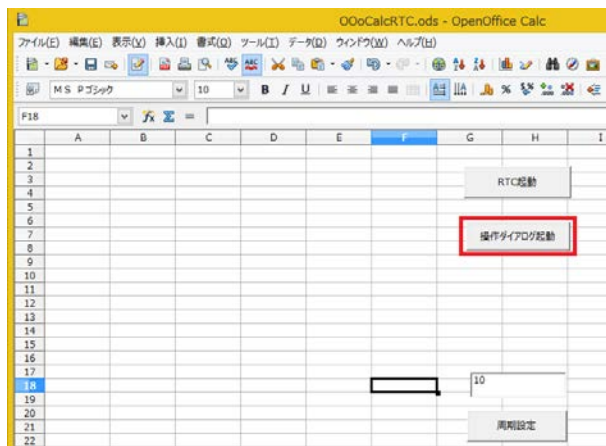
OutPortの動作確認

- 一旦、RTCを非アクティブ化する

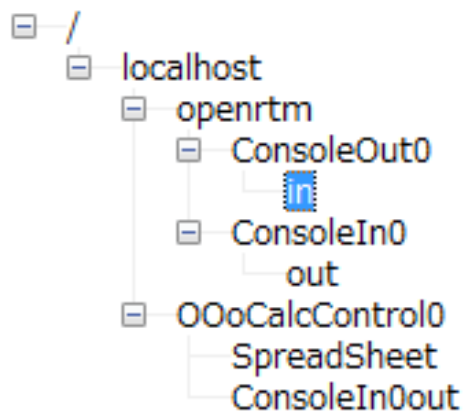


InPortの接続

- LibreOffice Calcの「操作ダイアログ起動」ボタンをクリック後、「ツリー表示」ボタンをクリック

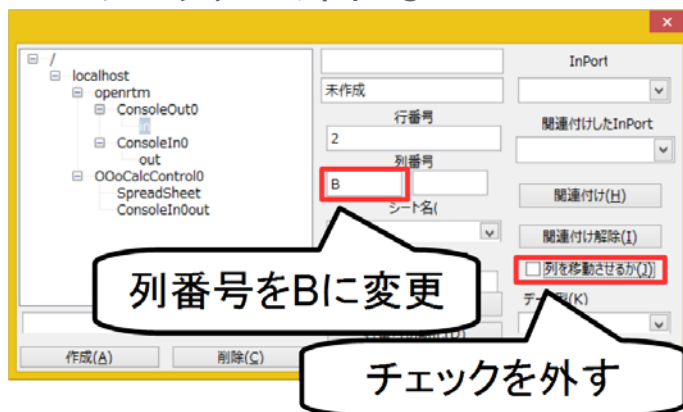


- ツリーから**ConsoleOut**の**in**を選択

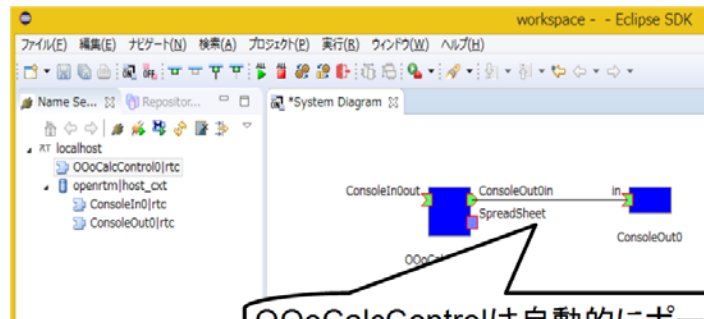
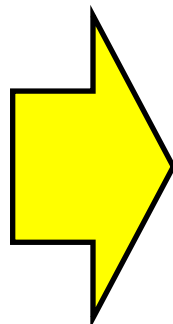
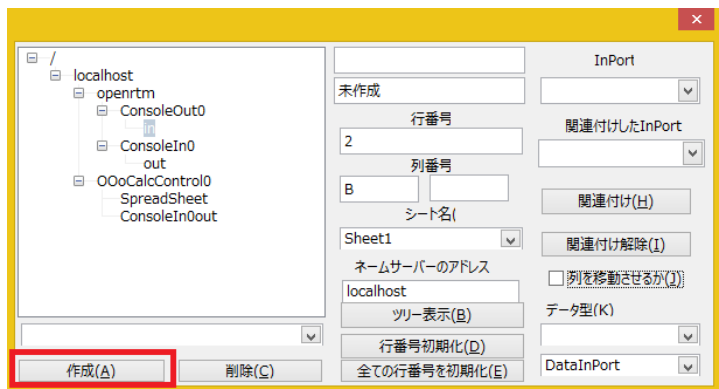


InPortの接続

- 列番号をBに設定
- 「列を移動させるか」のチェックを外す
 - ※2回クリックしないとチェックが外れない



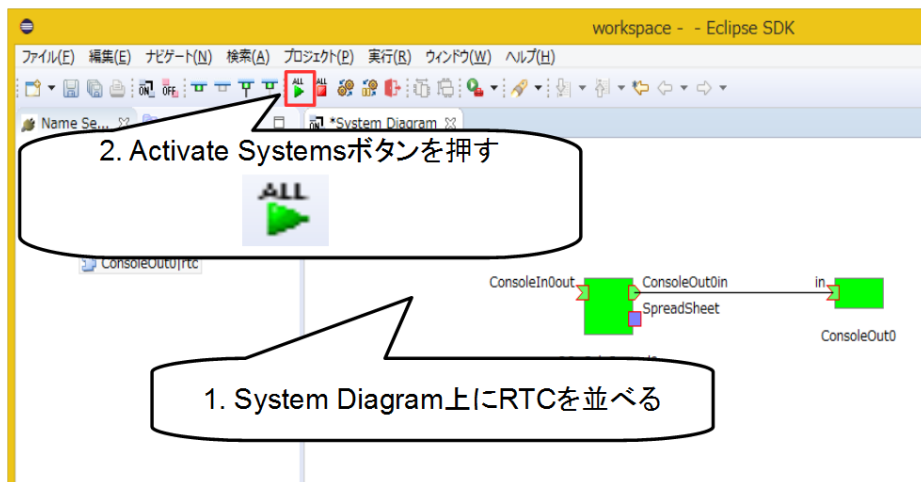
- 「作成」ボタンをクリックする



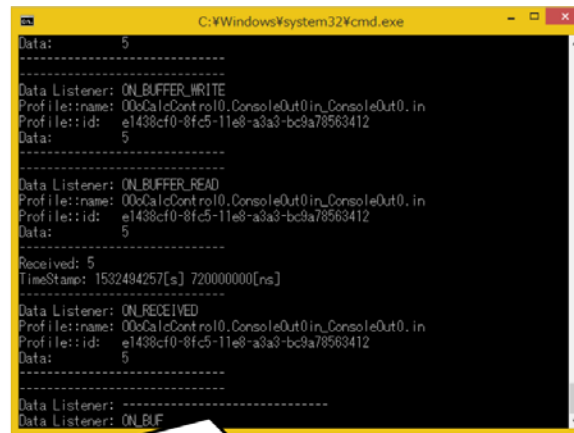
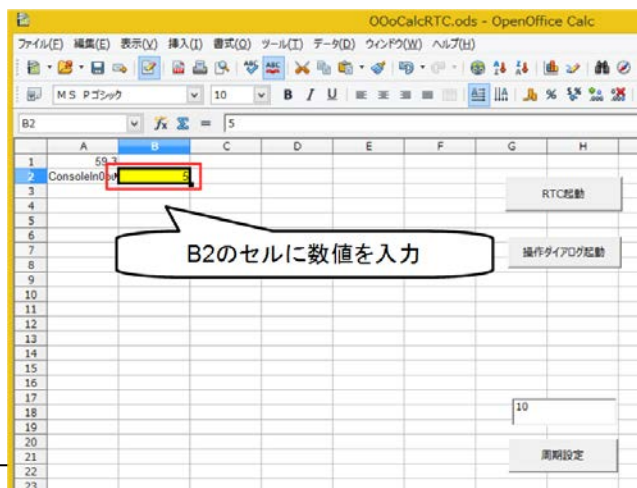
OOoCalcControl0は自動的にポートを生成し、ConsoleOutと接続する

InPortの動作確認

- RT System EditorでRTCをアクティブ化する

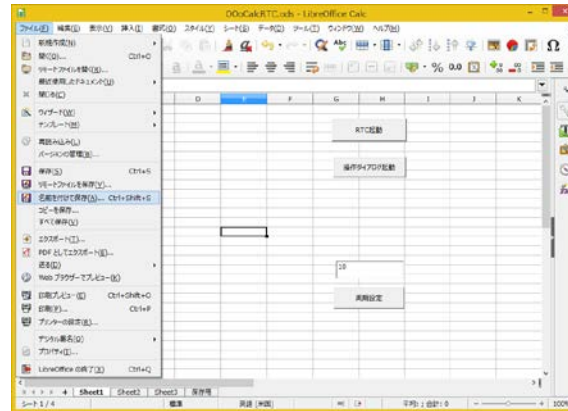


- B2のセルに数値を入力する

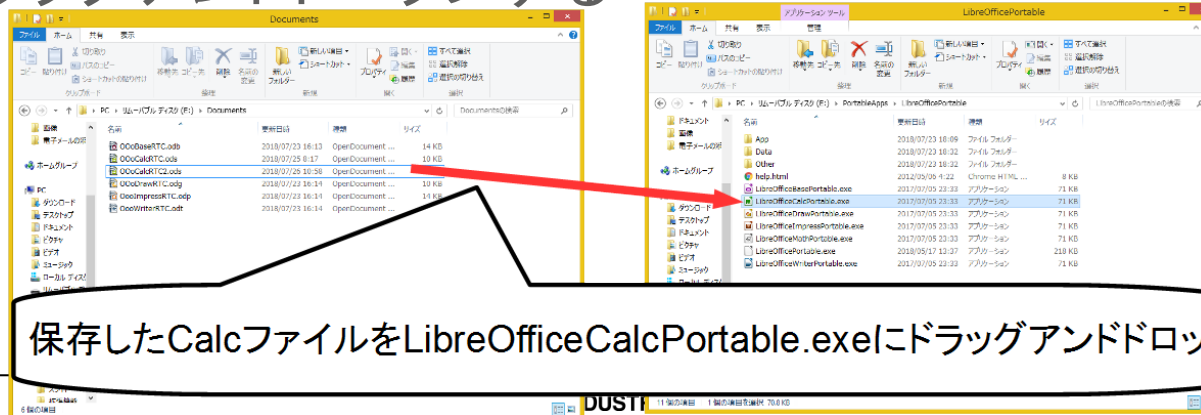


保存

- Calcファイル(.ods)を名前を付けて保存する
 - 接続したポートの情報などはCalcファイル(.ods)に保存される

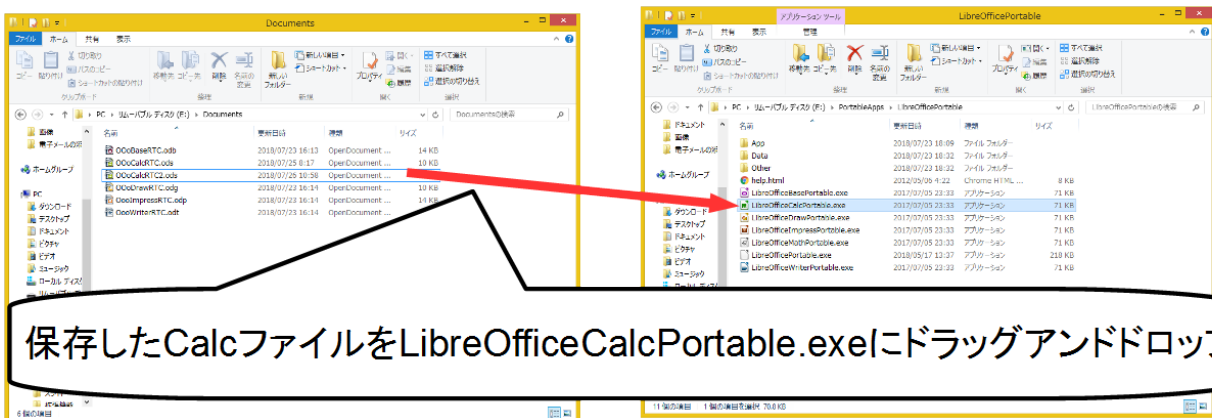


- 保存したCalcファイルをUSBメモリ内の PortableApps¥LibreOfficePortable¥**LibreOfficeCalcPortable.exe** にドラッグアンドドロップする

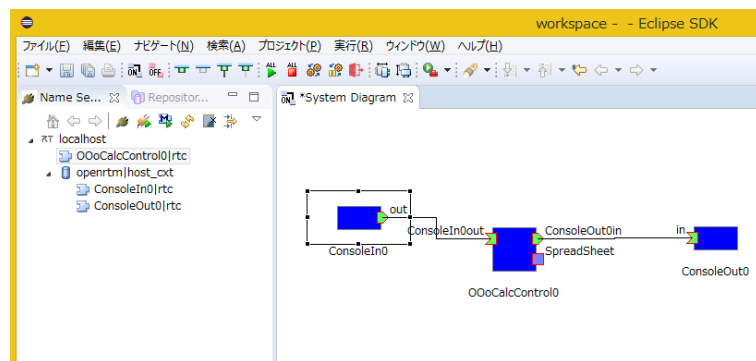
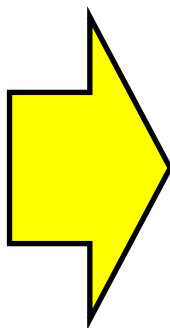
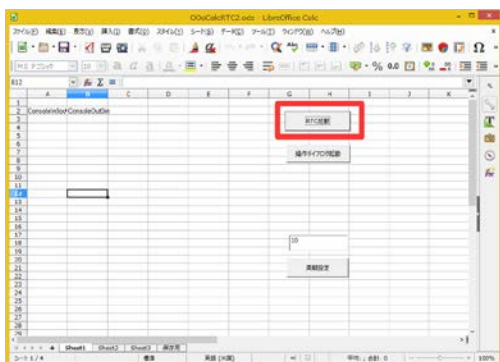


復元

- 保存したCalcファイルをUSBメモリ内の PortableApps¥LibreOfficePortable¥**LibreOfficeCalcPortable.exe** にドラッグアンドドロップする



- 「RTC起動」ボタンを押すと、ポートに自動接続して状態を復元する



まとめ

RTCの動作確認、テストで有用なツールを紹介した

- **RtStorage**

- 出力データの保存と再生が簡単
- 一度保存したデータを再利用できるため、例えばセンサRTCのデータを保存しておいて再生することで、InPort側のRTCのテストだけを実行できる(テストでセンサRTCを実行する必要がない)

- **表計算ソフトとRTCを連携させるためのツール**

- 指定のデータの入力が簡単
- 出力データが視覚的に分かりやすい
- グラフ表示も併用するなど様々な使い方ができる

Lua版RTミドルウェア (OpenRTM Lua)

OpenRTM Lua

- プログラミング言語Luaに対応したRTミドルウェア
 - RTCを**Lua**、もしくは**MoonScript**、**LuneScript**で開発可能にする

Lua

```

32 ConsoleIn.new = function(manager)
33     local obj = {}
34     -- RTObjectをメタオブジェクトに設定する
35     setmetatable(obj, {__index=openrtm.RTObject.new(manager)})
36     -- データ格納変数
37     obj._d_out = openrtm.RTCUtil.instantiateDataType("::RTC::TimedLong")
38     -- アウトポート生成
39     obj._outOut = openrtm.OutPort.new("out",obj._d_out,"::RTC::TimedLong")
40
41     -- 初期化時のコールバック関数
42     -- @return リターンコード
43     function obj:onInitialize()
44         -- ポート追加
45         self:addOutPort("out",self._outOut)
46
47         return self._ReturnCode_t.RTC_OK
48     end
49     -- アクティブ状態の時の実行関数
50     -- @param ec_id 実行コンテキストのID
51     -- @return リターンコード
52     function obj:onExecute(ec_id)
53         io.write("Please input number: ")
54         local data = tonumber(io.read())
55         -- 出力データ格納
56         self._d_out.data = data
57         -- 出力データにタイムスタンプ設定
58         openrtm.OutPort.setTimestamp(self._d_out)
59         -- データ書き込み
60         self._outOut:write()
61         return self._ReturnCode_t.RTC_OK
62     end
63
64     return obj
65 end
    
```

MoonScript

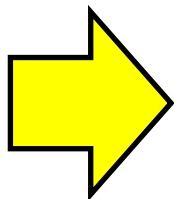
```

27 class ConsoleIn extends openrtm_ms.RTObject
28     -- コンストラクタ
29     -- @param manager マネージャ
30     new: (manager) =>
31         super manager
32         -- データ格納変数
33         self._d_out = openrtm_ms.RTCUtil.instantiateDataType("::RTC::TimedLong")
34         -- アウトポート生成
35         self._outOut = openrtm_ms.OutPort("out",self._d_out,"::RTC::TimedLong")
36
37     -- 初期化時のコールバック関数
38     -- @return リターンコード
39     onInitialize: =>
40         -- ポート追加
41         @addOutPort("out",self._outOut)
42
43         return self._ReturnCode_t.RTC_OK
44
45     -- アクティブ状態の時の実行関数
46     -- @param ec_id 実行コンテキストのID
47     -- @return リターンコード
48     onExecute: (ec_id) =>
49         io.write("Please input number: ")
50         data = tonumber(io.read())
51         -- 出力データ格納
52         self._d_out.data = data
53         -- 出力データにタイムスタンプ設定
54         openrtm_ms.setTimestamp(self._d_out)
55         -- データ書き込み
56         self._outOut\write()
57         return self._ReturnCode_t.RTC_OK
58
59
    
```

OpenRTM Lua

- プログラミング言語Luaに対応したRTミドルウェア
 - Luaは軽量なプログラミング言語であり、RTC実行環境一式で**2MB程度**
Lua(2MB)>>>>C++(8MB)>Python(10MB以上)>>>Java(笑)
 - **スクリプト言語**であるため、Pythonと同様に効率的な開発が可能
 - LuaJITによる**高速な動作**
 - Luaはゲーム開発で主に使用されるプログラミング言語のため、10000体×onExecute関数1000回のキャラクターの当たり判定にかかる時間を計測

言語	結果[s]
Lua	4.3324
LuaJIT	1.2459
C++	0.6142
Python	6.4802



Pythonを圧倒し、C++に匹敵する性能

OpenRTM Lua

- プログラミング言語Luaに対応したRTミドルウェア
 - 他のソフトウェアへの組み込み



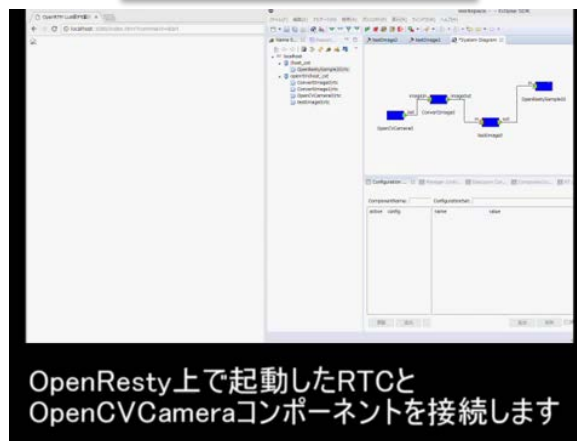
ゲームエミュレータ



ロボットシミュレータ



物理シミュレータ

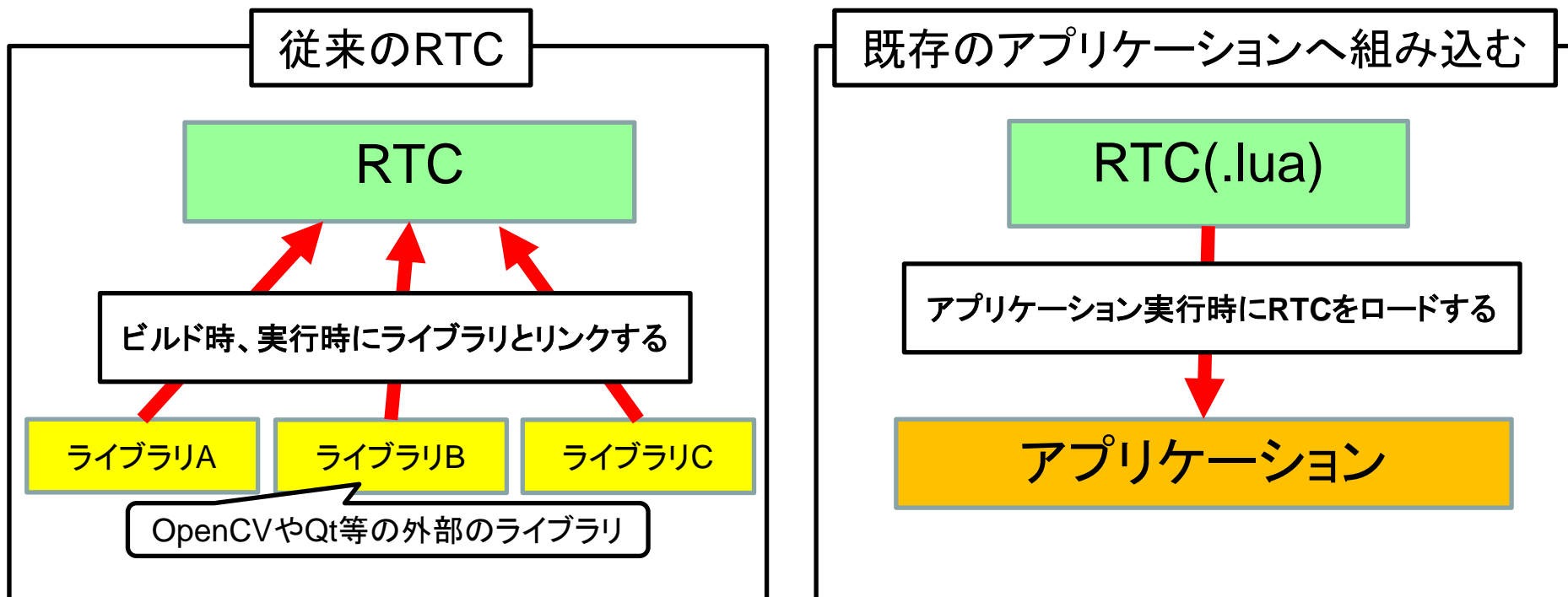


OpenResty上で起動したRTCと
OpenCVCameraコンポーネントを接続します

WEBアプリサーバー

既存のアプリケーションへの組み込み

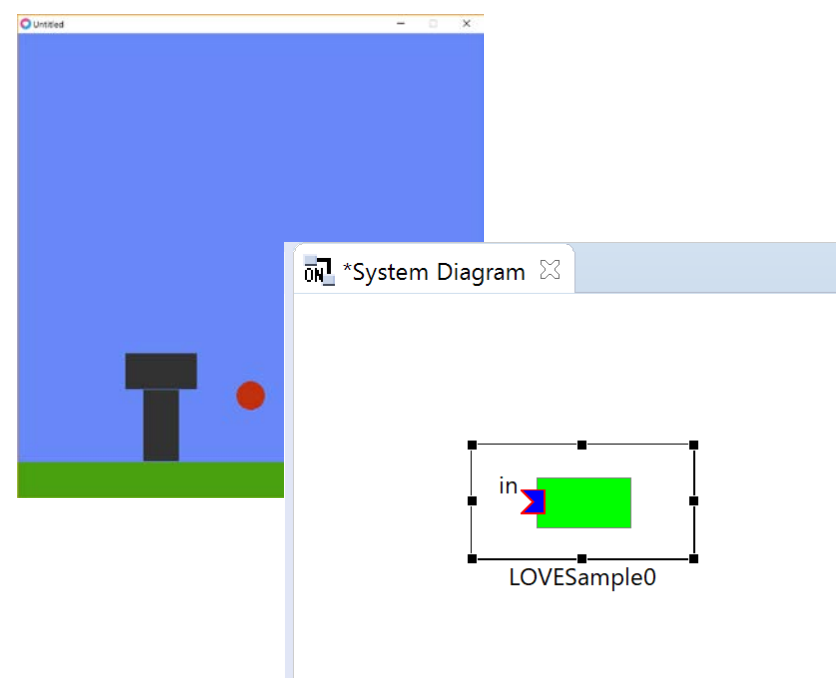
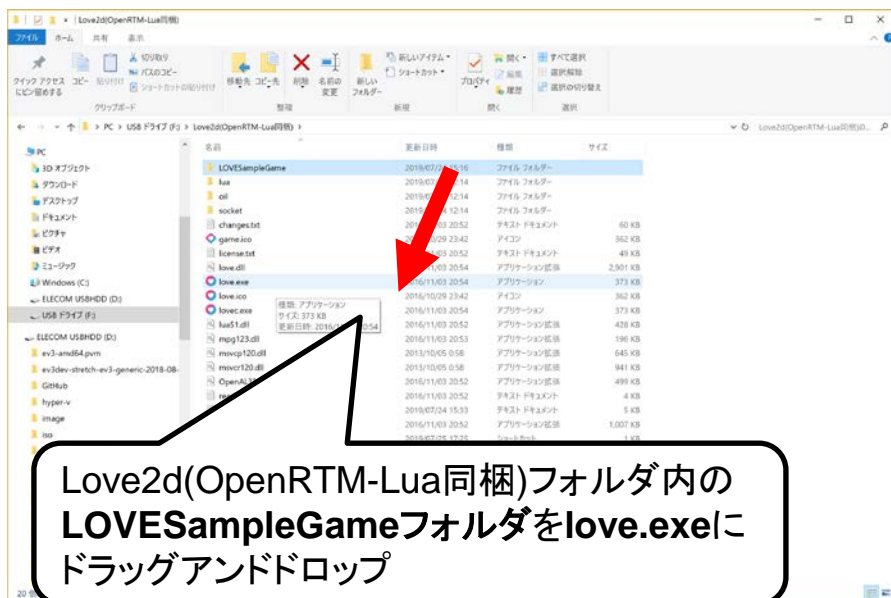
- OpenRTM-Luaは既存のアプリケーションへ組み込むことを得意としている



- V-REP等は自分でビルドすると大変だが、Luaにより容易に機能を追加可能になっている

2Dゲームエンジン LÖVEでの応用例

- 配布のUSBメモリに以下のソフトウェアを同梱
 - LÖVE(ゲームエンジン)
 - OpenRTM-Lua
 - LÖVE用RTCのサンプル

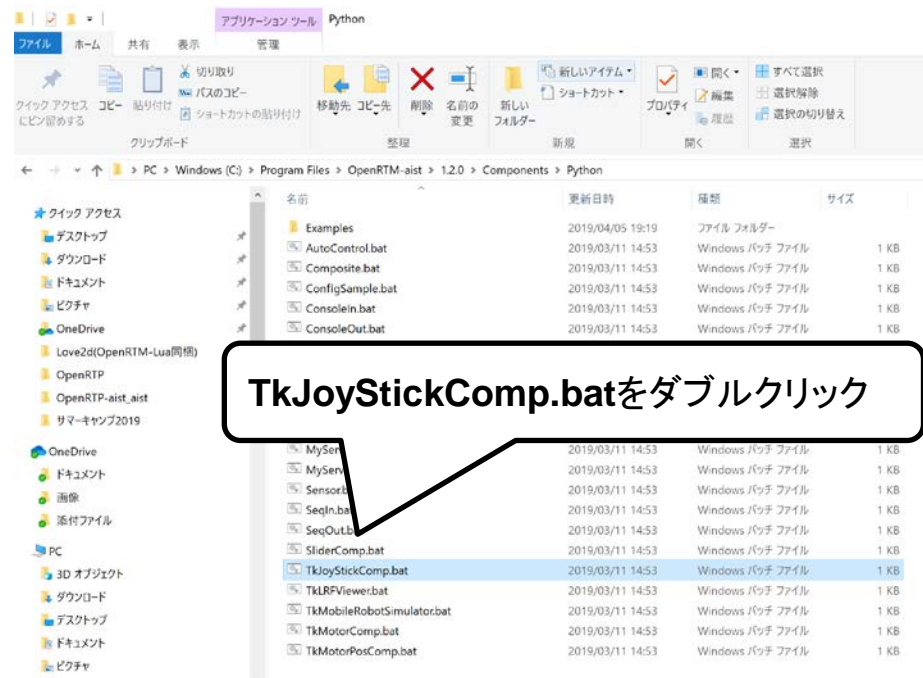
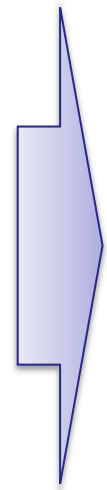


2Dゲームエンジン LÖVEでの応用例

- ジョイスティックコンポーネント(OpenRTM-aist Python版 サンプル)を起動して接続



Windows 10の場合、左下の「ここに入力して検索」にPython_Examplesと入力して検索して実行

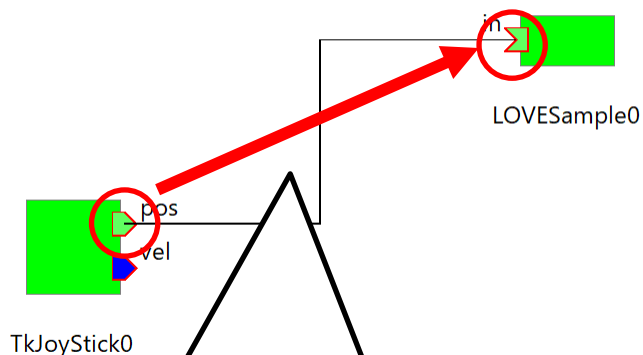


TkJoyStickComp.batをダブルクリック

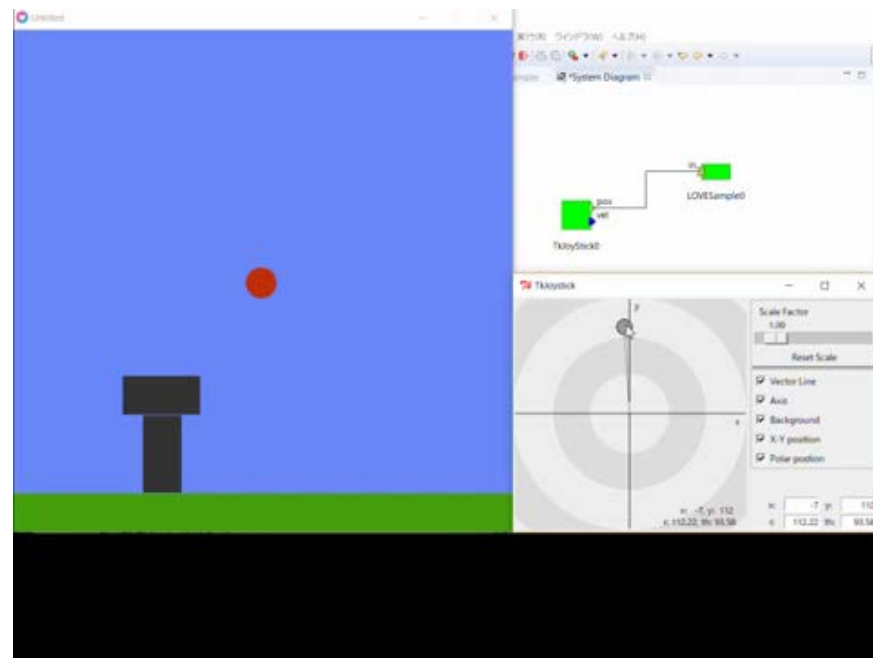
2Dゲームエンジン LÖVEでの応用例

- ジョイスティックコンポーネント(OpenRTM-aist Python版サンプル)を起動して接続

*System Diagram



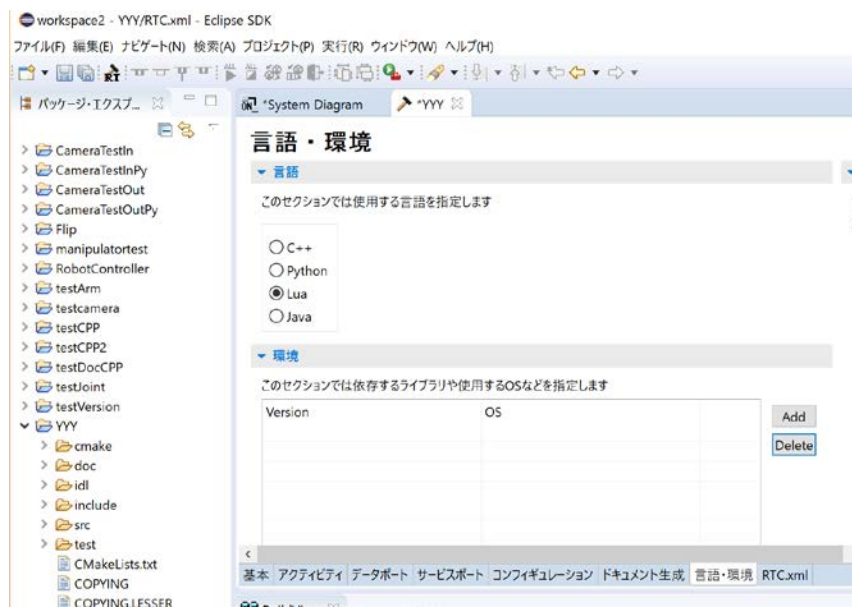
TkJoyStick0のposからLoveSample0のinにドラッグアンドドロップする。
 ※OpenRTM Luaの仕様上、LOVESample0からTkJoyStick0にドラッグアンドドロップするとエラーになります。



Luaスクリプティング機能をサポートするアプリケーション(今回はゲームエンジン)とOpenRTM-aistの連携が可能

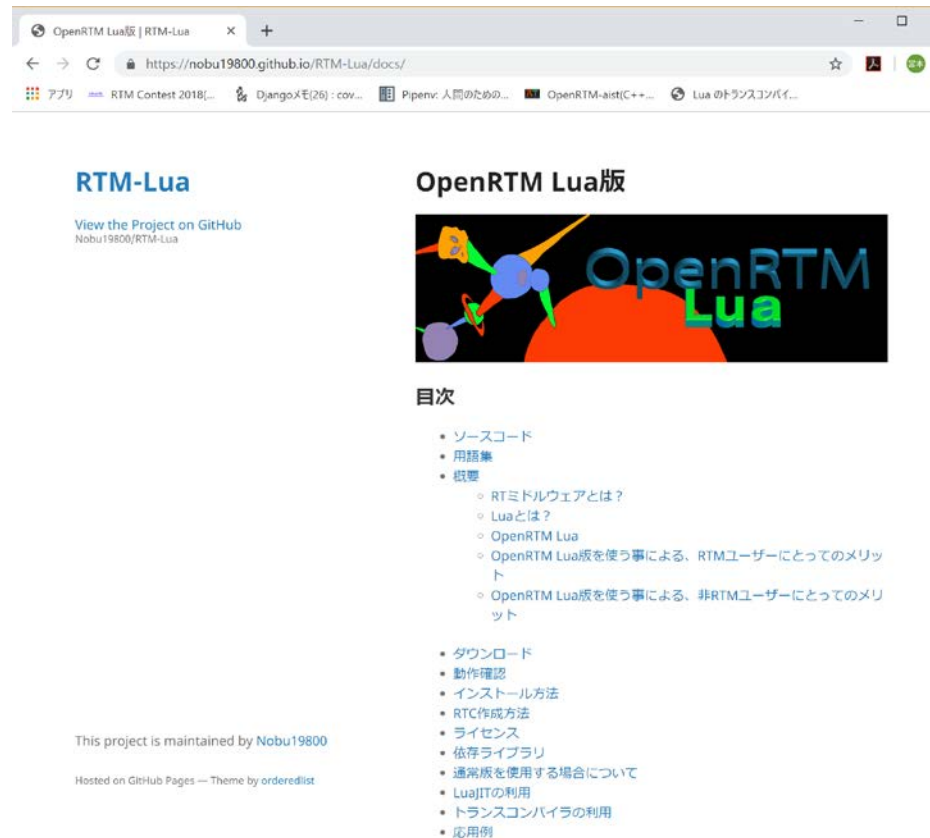
LÖVE用RTCの作成手順

- 以下のファイルが必要
 - LOVESampleGameフォルダ(名前は任意)
 - **main.lua**
 - LÖVEがロードするスクリプトファイル
 - LÖVEがmain.luaの以下の関数を呼び出す
 - » load関数: main.luaのロード時に呼び出し
 - » draw関数: 描画更新時に呼び出し
 - » update関数: フレーム更新時に呼び出し
 - 以下のLOVESample.luaをロードしてRTCを起動する
 - **LOVESample.lua** (名前は任意)
 - RTCの実装
 - RTC Builderで生成できる
 - onExecute関数等を実装する



OpenRTM Lua

- 詳細な説明は以下に記載
 - 「OpenRTM Lua」で検索すると出る



The screenshot shows a web browser displaying the GitHub repository page for OpenRTM Lua. The page title is "RTM-Lua" and the URL is "https://nobu19800.github.io/RTM-Lua/docs/". The main content area features a header "OpenRTM Lua版" and a large image with the text "OpenRTM Lua". Below the image is a table of contents (目次) listing various sections such as "ソースコード", "用語集", "概要", "ダウンロード", and "動作確認".

RTM-Lua
View the Project on GitHub
Nobu19800/RTM-Lua

OpenRTM Lua版

目次

- ソースコード
- 用語集
- 概要
 - RTミドルウェアとは？
 - Luaとは？
 - OpenRTM Lua
 - OpenRTM Lua版を使う事による、RTMユーザーにとってのメリット
 - OpenRTM Lua版を使う事による、非RTMユーザーにとってのメリット
- ダウンロード
- 動作確認
- インストール方法
- RTC作成方法
- ライセンス
- 依存ライブラリ
- 通常版を使用する場合について
- LuaJITの利用
- トランスコンパイラの利用
- 応用例

This project is maintained by Nobu19800
Hosted on GitHub Pages — Theme by orderedlist

<https://nobu19800.github.io/RTM-Lua/docs/>